



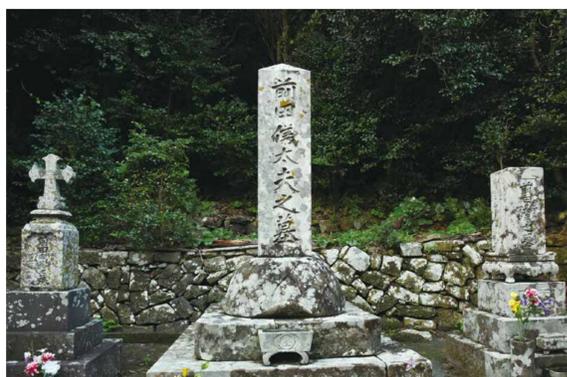
かしらがしま しゅうらく 9 頭ヶ島の集落

9. Villages on Kashiragashima Island

「頭ヶ島の集落」は、潜伏キリシタンが信仰の共同体を維持するに当たり、どのような場所を移住先として選んだのかを示す5つの集落のうちの一つである。

19世紀、外海地域から各地へ広がった潜伏キリシタンの一部は、病人の療養地として人が近づかなかった頭ヶ島を移住の適地として選び、仏教徒の開拓指導者のもとで信仰をカモフラージュしつつ移住し、ひそかに共同体を維持した。

解禁後はカトリックに復帰し、禁教期における指導者の屋敷の近くに教会堂を建てたことにより、彼らの「潜伏」は終わりを迎えた。



撮影：池田勉

病人の療養地として人が近づかなかった頭ヶ島へ潜伏キリシタンが入植するきっかけをつくった前田儀太夫(中央)の墓である(右は息子、左は孫)。儀太夫の墓碑には開拓の経緯が刻み込まれており、孫の代にはキリスト教へ改宗したこともわかる。頭ヶ島における潜伏キリシタン集落の形成と前田家との関係性を示す物証である。



撮影：池田勉

1865年の「信徒発見」後、上五島地域の潜伏キリシタンの頭目であったドミンゴ松次郎が頭ヶ島へ移住する際、居を構えて「仮の聖堂」としていた跡地である。その傍には、1919年、近傍で産出する砂岩を用いて頭ヶ島天主堂が建設された。